



舊薩藩御城下絵図面(嘉永年間前後)





燕尾島市史

I

監
修

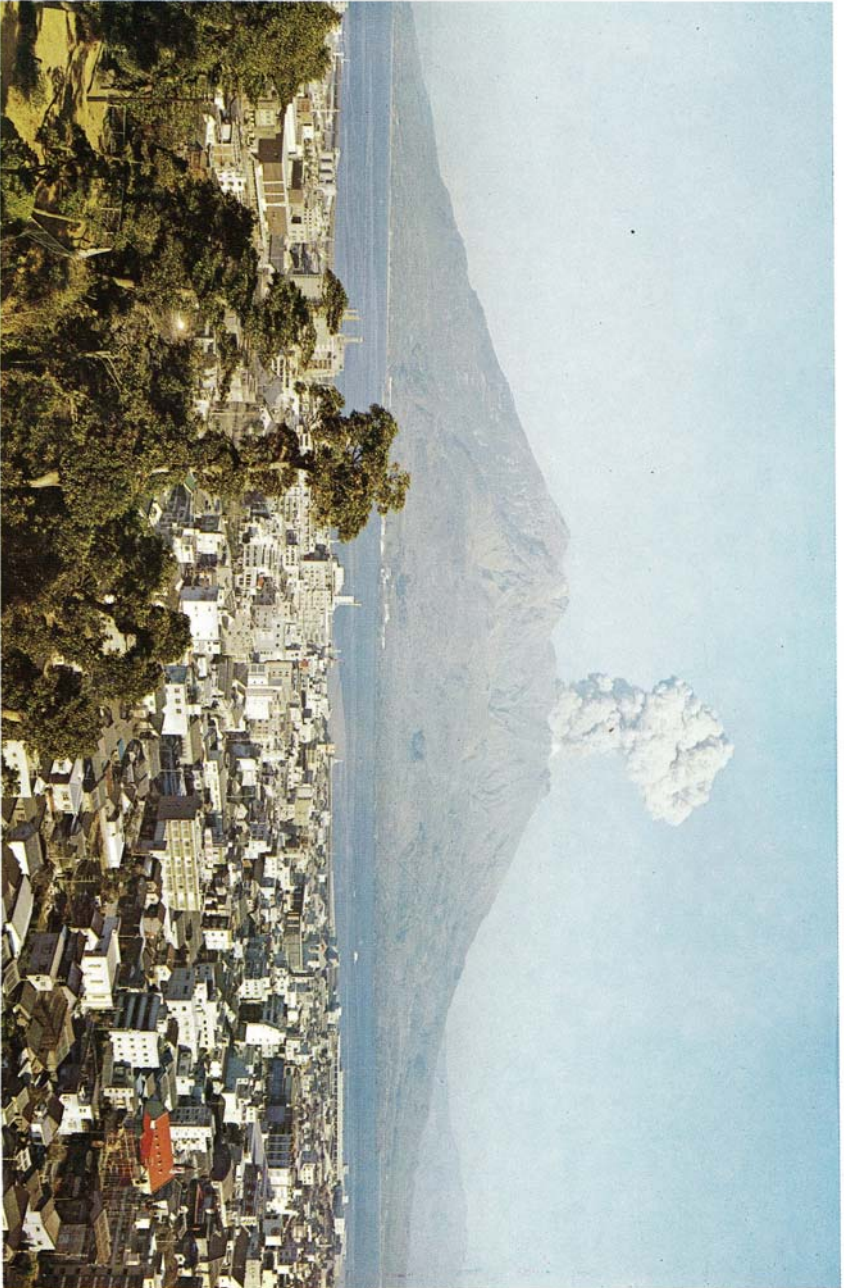
元鹿兒島市長
郷土史家

勝
目
清

鹿兒島大学
教授

北
川
鉄
三

題字
鹿兒島市長
末吉利雄



鹿児島市街(城山より桜島を望む)

序 文

本市は、明治二十二年四月一日の市制施行以来、四回にわたり隣接町村を編入して発展してきました。さらに昭和四十二年四月二十九日に、谷山市と合併いたしました。新しい「鹿児島市」として八十年のよわいを迎えるにいたしました。これを記念して鹿児島市史を編さんすることになりました。本市では大正五年と大正十三年の二回、市史が刊行されていますが、その後の、南九州における政治・経済・文化の中心都市として、市政進展の姿を振り返ってみて、ここに今日の鹿児島市発展の基礎を築いた歴史編（Ⅰ）を刊行することにいたしました。

これは、原始時代から明治二十二年四月の市制施行以前までの歴史であります。その昔、鹿児島を拠点とした島津氏によって三州の統一が行なわれ、やが

て鶴丸城が築かれ城下町が形成されました。その後、幾多の変遷を経て、輝ける明治維新の大業をなしとげた、多くの先人たちの活躍の跡を明らかにし、とくに将来の鹿児島をになう若い世代の人々に誇り得る、薩摩の歴史を引き継いでいくためにも、是非一読をおすすめできるものと確信して発刊したもので、まことに喜びにたえない次第であります。

なお、この歴史編を刊行するにあたりまして、監修、執筆の労を賜わった諸先生、並びに市史編さん委員、資料、写真等のご提供を頂いた関係各位に對しまして、深甚なる謝意を表すると共に、引き続きさらに現代編(Ⅱ)、資料編(Ⅲ)の編さんにご協力を賜わらんことをお願いする次第であります。

昭和四十四年二月

鹿児島市長 末 吉 利 雄

例言

- 一、本巻は鹿児島市史全三巻のうち、第一巻歴史編である。
- 一、本巻は原始古代から明治二十二年三月市制施行前までを対象とした。
- 一、文字は当用漢字と平仮名とを原則として用いたが人名・地名などの固有名詞および学術用語などは、この限りではない。たとえば、荘園の関係用語のごとく荘と庄、園と園とを併用した例もある。
- 一、人名・地名などの固有名詞および学術用語などは、できるだけ、初出のところで読み仮名をつける方針をとった。
- 一、かなづかいは、現代かなづかいをを用い、平易な叙述を基本とした。
- 一、本巻の背文字は鹿児島市長末吉利雄の揮毫による。
- 一、本巻見返しの絵は舊薩藩御城下絵図面―嘉永年間前後（鹿児島県立図書館所蔵）による。

鹿児島市史 目次

第一編 自然環境

第一章 位置と沿革……………一

第二章 鹿児島市の地質と地形……………四

I 鹿児島県の地質と地形……………四

阿多・始良火山以前……………四

阿多・始良火山の活動とその後の変化……………五

II 鹿児島市の地質と地形……………八

概観……………八

台地の地質と地形……………九

河川と河谷の性質……………三

沖積平野……………五

桜島……………三

第三章 鹿児島市の気候……………五

I 概説……………五

II 気 温 二六

鹿兒島の暖かさ 二六

冬季の気温 二六

III 降 水 量 二九

降水の季節配分 二九

台風 の 雨 三三

IV 風 の 性 質 三三

通常 の 風 三三

台風 の 風 三四

V 鹿兒島の四季 三五

春 三五

夏 三五

秋 三六

冬 三七

第二編 原始古代編

第一章 原始時代 三六

I 縄文文化

一 概観

二 遺跡

吉野台地周辺遺跡

西辺山地帯の遺跡

南部台地縁辺遺跡

三 遺物

早期

前期

中期

後期

晩期

四 生活・信仰と環境

五 周辺地域との関連性

II 弥生文化

一 概観

二 遺跡

三 遺物

目次

前	期	三二
中	期	三三
後	期	三六
四	生活・信仰と環境	三七
五	周辺地域との関連性	三九
III	古墳時代	四一
一	概観	四二
二	遺跡	四七
第二章	古代の鹿兒島	四九
I	南九州の神話	五〇
	古代史への弁明	五〇
	天孫降臨神話	五二
	日向神話	五二
II	肥人と隼人の国	五五
	狗奴国と熊襲	五五
	肥人	五九
	隼人	一〇〇

	薩隅の国県制	一〇三
III	鹿兒島郡の創設	一〇四
	薩隅の律令制	一〇四
	鹿兒島郡の創設	一一一
	律令制の進展と衰退	一二四
IV	鹿兒島郡の庄園	一二七
	島津庄の成立	一二七
	鹿兒島郡の庄園	一三〇
	島津庄の支配機構	一三三
	島津庄の伝領	一三四
	第三編 中世編	
	第一章 鎌倉時代の鹿兒島	一三七
I	はじめに	一三七
	宇宿村	一三七
	向島	一三八
II	鹿兒島郡	一三九

建久凶田帳	二九
郡司	三〇
名主	三二
地頭	三四
III 満家院	四〇
建久凶田帳	四〇
郡(院)司	四一
地頭	四三
名主	四五
II 内乱期と鹿兒島	五一
在地領主の政治的動向	五一
土地所有関係(所職)の推移	五九
III 地頭職の変遷と守護島津氏による土地処分	六九
第二章 南北朝時代の鹿兒島	七五
I 建武の新政と鹿兒島	七五
II 内乱期と鹿兒島	七六
III 室町時代の鹿兒島	三〇

I	城下町鹿兒島の誕生	三〇
	領国形成への道	三〇
	清水館の建設	三一
	薩隅日守護職の統一	三四
II	領国形成の起点	三八
	守護職の争奪	三八
	薩摩国方の被官化	三三
III	国一揆の制圧	三四
	守護職の動揺	三四
	守護支配権の進展	三七
IV	下剋上の世	三〇
	島津一門の反抗	三〇
	外様勢力の反撥	三三
V	鹿兒島の郷村制と海外貿易	三五
	鹿兒島の郷村制	三五
	庄園の変質	三六
	門体制の成立	三八

薩摩の海外貿易	二四
対鮮貿易	二七
薩琉関係	二五〇
VI 鹿兒島の室町文化	二五二
禅宗と五山文学	二五二
薩摩の朱子学	二五四
水墨画	二五五
連歌	二五五
第四章 戦国・織豊期時代の鹿兒島	二五九
I 島津氏の三州統一	二五九
概観	二五九
島津氏の内訌	二六〇
島津貴久、内城に拠る	二六五
三州統一の進展	二六八
II 三州統一以後の島津氏	二七三
島津氏の九州制覇	二七三
豊臣秀吉の九州征伐	二七五
朝鮮の役と検地	二七六

第四編 近世編

第一章 城下の変遷

I 城下の構成と藩制の整備

鶴丸城の構築

城下の構成

人口

III 海外交通と鹿児島

関ガ原の役

港町、鹿児島

日明貿易と薩摩

薩摩と琉球

キリスト教と鹿児島

IV 鹿児島文化

仏教の保護

神社の崇敬

儒教の普及

武士の教養

目次

三五

三三

三七

三六

三六

三二

三一

三一

三〇九

三〇九

三〇二

二九一

二八七

二八三

二八三

二八一

藩制の整備……………三三〇

II 城下士の生活……………三三五

城下士の構成とその数……………三三五

城下士の知行形態……………三三九

武家屋敷と組分け……………三五二

武芸の訓練……………三六〇

III 城下町の発展……………三六四

町の整備と町人の生活……………三六四

城下の整備……………三七八

IV 幕末の動き……………三八五

様式工場の出現……………三八五

薩英戦争と鹿児島の変容……………三九二

第二章 農村の生活……………四〇三

I 近在……………四〇三

近名と近在……………四〇三

近在の成立……………四〇五

近在の人口……………四〇七

身分構成……………四〇八

	II	近世的支配組織の成立	四四
		支配組織の概観	四四
		検地	四六
	III	農民支配の実態	四三
		門割制度	四三
		門の人的構成	四二
		門の土地所有	四七
		門割制の起源	四〇
		農民の負担	四四
	IV	近在の姿	四七
		小野村	四七
		西別府・武・田上村	四九
		横井野町	四二
		吉野の牧	四四
	第三章	文化の発展	四七
	I	概観	四七
	II	学問	四八
		儒学	四八

目次

目次

国	学	四五三		
史	学	四五五		
地	理	学	四五八	
洋	学	四六〇		
医	学	四六二		
曆	学	四六四		
III 実	学	四六五		
军事科学と集成館事業	四六五		
造船事業	四六七		
IV 文	芸	四六八		
文	学	四六八		
和	歌	四七四		
俳	句	四七六		
その他	四七六		
V 教	育	四七六		
造	士	館	四七六	
郷	中	教	育	四八二
出	版	四八八

	VI	芸	術	四〇〇								
		繪	画	四〇〇								
		書	道	四〇一								
		建	築	四〇一								
		工	芸	四〇六								
	VII	芸	能	四〇七								
		薩	摩	琵琶	四〇七							
		天	吹	四〇〇								
	VIII	文	化	遺	産	四〇〇						
		西	田	橋	四〇〇							
		異	人	館	四〇一							
		薩	摩	切	子	四〇一						
	第四章	宗	教	の	う	ご	き	四〇四				
	I	藩	の	政	策	四〇四						
		島	津	家	の	宗	旨	四〇四				
		切	支	丹	・	一	向	宗	の	禁	止	四〇四
		宗	門	改	め	四〇八						
		公	認	の	諸	宗	四〇四					

II 鹿兒島の社寺……………五七

神 社……………五七

寺 院……………五九

III 神仏分離と廃仏毀釈……………五六

概 観……………五六

薩摩藩の神仏分離……………五九

薩摩藩の廃仏……………五〇

第五章 民俗と行事……………五五

I 衣 食 住……………五五

住 生 活……………五六

衣 生 活……………五六

食 生 活……………五八

武士の生活……………五九

II 人の一生……………五九

産 育 習 俗……………五九

二才組と婚姻習俗……………五一

年祝と葬式習俗……………五三

武家の儀礼	五五
III 年中行事	五六
武家の年中行事	五八
農家の年中行事	五九
商家の年中行事	六一
IV 祭礼と講	六二
六月灯	六〇
祇園祭	六一
稻荷祭	六四
諏訪祭	六六
浜下り神事	六八
講	六一
V 芸能・童戯その他	六二
太鼓踊	六三
吉野の馬追い	六七
十五夜踊と綱引	六九
童戯	七〇

民芸品など……………五二

第五編 明治前期の鹿児島

序……………五五

第一章 日本近代化の歩み……………五五

I 政 治……………五五

鳥羽・伏見の戦……………五六

廃藩置県……………五七

征韓論……………五九

西南の役……………六〇

政党結成……………六〇

自由党解党……………六七

太政官廃止……………六〇

II 文 明 開 化……………六一

III 資本主義への歩み……………六四

工場払い下げ……………六四

地租改正と秩禄処分……………六五

第二章 鹿児島県の近代化……………六六

I 前期……………六七

凱旋兵士鹿児島県に帰る……………六七

県庁所在地鹿児島……………六三

御親兵基地鹿児島……………六三

仏寺の受難……………六八

文明のあけぼの……………六三

燃える鹿児島……………六五

薩軍従軍者の口供……………七一

II 後期……………六四

復興……………六五

市街地……………七三

二一カ村……………七八

立ち上がる鹿児島……………七〇

III 市民の動態……………七七

